
私と先輩と、バスケットと恋。

由紀琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と先輩と、バスケットと恋。

【コード】

N0709Z

【作者名】

由紀琳

【あらすじ】

館華亜緒たかあなあずがは容姿端麗で大人しい性格のいい子。…というのは外面で、本当の性格は女の子らしくない性格の悪い子。そんな亜緒がある日一ノ瀬良いちのせりょうと出会い…

登場人物（前書き）

よろしくお願ひします!!

登場人物

・館華 たちばな
亜緒 あお

女 9月9日生 おとめ座 16歳 特技 猫かぶり 趣味 人間観察 身長165cm 体重48kg

普通より少し貧しい家庭。中学の時にいろいろあり、猫をかぶって大人しい性格で学校生活を送る。本当の性格はキツイ。趣味の間観察をしながら、心の中では毒舌吐きまくり。でも優しい所もある。女子のくせに相当な面倒くさがりや。成績はまあまあいい方。だと自分で思ってるだけで、本当は5位以内に入るほど。

艶やかな黒髪で、胸の辺りまでの長さ。小顔で二重のパッチリした目。口は小さく、口角は少し下がり気味。化粧はしない。細身で足が長め。モデル体型に近い。「容姿端麗でいい子」と言われ、男女共からモテている。無自覚。素顔の時は自分のことを「うち」と呼ぶ。猫をかぶっている時は「私」。

・柏原 かしわばら
真 まこと

男 10月5日生 てんびん座 16歳 特技 野球 趣味 読書 身長179cm 体重65kg

普通の家庭。中学時代は野球部だった。亜緒と同中出身のため、本当の性格を知っている。性格はサバサバしていて、何事もあまり気にしない。亜緒の性格が変わったのもあまり気にしていない。クラスには普通に馴染んでいる。成績は普通。

校則が結構自由で、髪は暗めの茶色、アシンメトリー。左分け。一重のくせに目が大きい。野球部だったこともあり、筋肉質で少しだけがっちりしている。特に好かれるワケでもなく、嫌われるワケでもない普通のヤツ。亜緒に何かと絡まれ、絡む。

・一ノ瀬良いちのせのら

男 5月20日生 おうし座 17歳 特技 バスケ 趣味 ス
ポーツ観戦 身長185cm 体重64kg

普通より少し上の家庭。小学生の時からバスケットをやっていて、才能に溢れている。今もバスケット部に所属していて、次期部長と噂されている。リーダーシップがあり、爽やかな性格。気配りができ、ユーマアがあり、優しい、という良いヤツで、運動神経抜群というカンプキな人間なため、ものすごくモテる。モツテモテ。少し自覚しているが、特に気にするわけでもない。

明るめの茶髪で、右分け。シャープなあごのライン。二重で目が大きい。唇は薄い。手足が長く、体中に筋肉がついているが、細マツチヨ。あることをきっかけに、亜緒にまわりつく。

・山田蘭子やまだらんこ

女 16歳 特技 情報集め 趣味 妄想 身長153cm 体重45kg

良のことが大好きな追っかけ。束縛がものすごい。ミーハー。でも、良一筋。自分を可愛いと思っているナルシ。でも、それほど可愛くない。女扱いをあまりされない。

腰まである長い髪。良のマネで明るめの茶髪。少し丸顔。一重で目は小さめ。華奢だが少し重め。

登場人物（後書き）

感想などよかったら書いてもらえると嬉しいです）、（

いつもの生活（前書き）

前回のサブタイトル間違えました！

すいません）・ ・ ・；A（アセアセ…

いつもの生活

館華^{たけはな}亜^あ緒。高校1年生、16歳。

家庭は結構複雑だと思う。少なくとも幸せではない。

貧乏だし、親は仲悪いし、お姉ちゃんは問題児だし。うちも中学の時少し問題児だったし。

友達はいない。正確には、いたけど自分からなくした。自分からね。うちなんかと関わってもいいことないと思ったからうちから縁を切った。「縁を切った」と言っても大したことはしていない。ただ、連絡取れなくしただけ。

学校ではうちの本当の性格を隠している。いわゆる、猫かぶり？みんなとは近すぎず、遠すぎずの距離で接してる。

まあ、こんな感じの生活。あ、そうそう。朝は結構早起き。なぜかっつて？

朝シャンするからだよ。今は冬に近いから、ものすごく寒い。そんな思いしてまで朝入る理由は…教えないよ。

今日も朝シャンして学校に行く準備をし、出発する。

「いつてきます。」

誰もいない家の中にボソツと呟き登校する。

親は共働きで、時々朝から二人共いないときがある。それが今日だ。まあ、そんなに関係ないけど。

「おはよー」
「あ、おはよう。」
「はよう。」
「おはよう。」

教室に入ると、みんなが挨拶をしてくる。内心めんどくさいけど、猫かぶりモードONの今のうちが無視できるわけない。てか、思ったんだけど、「はよう。」ってなんだし。「お」と「う」はどこいったんだよ。「はよ」なんて言葉、日本語にないし。日本人なんだから日本語正しく使えよ。つかえないなら英語でも使え。「G o o d m o r n i n g ! 」とか言ってるやいいじゃん！！
…おおっと、ちよっとツツコミ過ぎたかな？（笑）
そんなことを思っていると、あの日本語が正しく使えない日本人もどきがまた声を掛けて来た。

「やっぱり今日もかわういーね！亜緒ちゃんは！」
「え。そんなことないよ。」

『かわういーね』だって。うざっ。うちソイツ嫌いなんだよね。かつこよくないし。チャラいし。

「またまた〜。そんなに謙虚になんなくていいんだよ？」
「そーそー。でもまた謙虚な所が可愛いよね〜」
「フフフ。みんなお世辞が上手いのね。」

ホント、お上手ね。…誰にでも言ってるんだろ、そんな言葉！ちよーウザインですけど。もう、どっか行ってくんないかな。そう思っているよ、

「おはよ。」

とデカイ体したヤツが入って来た。…柏原真だ。かしわはま けん

「おはよう。」

と笑顔でうちが返すと、見逃してしまっくらい一瞬だけ、ニヤツと笑った。

…何が面白いのよ。ムカつく。

真はうちの横を通り過ぎ、みんなに挨拶をしてうちの後ろに座った。

「よお。猫かぶり亜緒ちゃん。」

真は前のめりになって小声で話して来た。

めっちゃムカつくー。でもまあ、小声で話してくれてるからまだいいけど。

「何のこと？」

うちは少し後ろを向いて知らないフリをして言った。

ホントは思いつきり叩きたいところだけど、ここはおさえて。

「そんなことする意味がわかんねえなあ。オレは。」

だから何のことだって言ってるじゃん。お前も外国人かつ。

答えるのもめんどくさい質問だったから、答えずに無視した。その代わり、色んな思いを込めた笑顔を返した。おもに怒り？（笑）

その後に先生が来て授業が始まった。

お昼。

うちはいつものように誰もいない空き教室でご飯を食べようとした。すると、ガラガラツとドアを開けて誰かが入って来た。

「よお。」

真だった。

真はなぜかわからないけど、一週間前ぐらいからここでうちと一緒にご飯を食べるようになった。

教室で絡んでくるのも一週間前ぐらいからだ。

「また？」

「いいじゃん。別に」

「ヤダ」

ちよつとぐらい一人になりたいもん。そして午前中あったことを思い出したりしたいし。

そんな思いを無視するように、

「まあまあ、食べようぜ？」

と言ってきた。

それに言い返そうとしたとき、

グウ~~~~~

と大きなお腹の音が鳴った。…間違いなくうちの音だ。

真は、声を出さないように口を閉じ、拳を作って口に当て、肩を小刻みに揺らしている。

こんな失態を真に見せるなんて…。なんてことだ。そう思うと、だ

んだんと頬が熱くなってきた。

うわぁ！顔まで赤くしちゃうなんて！…最悪だ。「○(TへT○)」
こんな絵文字が当てはまってしまう。

出来るなら時間を戻したい。そう思っている間にもまたお腹が鳴ってしまった。

「ハラ、めっちゃ空いてるみたいだから早く食おうぜ？」

ううう。めっちゃ悔しい！！いつか仕返ししてやる！覚悟してろ、

真！…！！

そしてうちはご飯を、やけ食い状態で食べた。

これがうちのいつもの生活。

いつもの生活（後書き）

感想などよろしくお願いします！！

先輩との出会い(前書き)

ついに先輩と出会っちゃいます) # ^ . ^ # (

先輩との出会い

今日もいつもの様な生活だと思っていた。

つまんないな、なんて一瞬でも思った自分がいて、自己嫌悪してしまっただ。

自分からこの人生を選んだんだから、こんなこと思っちゃいけない。それに、真もいるから大丈夫か。またお昼一緒なのかな。

…って！また変なこと考えちゃった！ダメダメ。何やってんだ、うち。よし、今日もがんばるぞ！

そんなことを思いながら、学校へ行った。

学校に着いてからは、猫をかぶった。今日もあの日本人もどきが声を掛けてきて、「かわういーね！」って言うてきた。マジうざ。本当なら関わりたくない。でも、しょうがない。そう自分に言い聞かせるしかない。

お昼もまた真が来て、一緒にご飯を食べた。

今日は羽目を外すことはなかった。…よし！

心の中でガッツポーズをしたくらい嬉しかった。

放課後。

今日は日直の日だった。

日直は二人で、うちともう一人の人は日本人もどきの友達だった。面倒だな、と思ったけどこっちの人はそんなにうるさくなかった。むしろ、優しくていい人だと思ったくらいだった。

そして最後は日誌を先生に渡すだけになったので、あまり役に立てなかったお詫びとして、うちが渡しに行くことにした。

先生を探すと、職員室にいた。

コンコン、と扉をノックして「失礼します。」と言って入る。

先生の席まで行き、日誌を渡して帰ろうとすると、

「あ、館華。ちょっと頼まれてくんない？」

と言ってきた。

めんどくさー。なんでよりによってうちの？もっと違うヤツに頼めよ。

でもまあ、断る理由もないし今はいい子だからやるしかないか。

「なんででしょう？」

心のつぶやきとは大違いの言葉遣いで聞く。

さっさと終わらせて帰る。

「あのさ、体育館からサッカーボール取って来てくれない？一つだけ泥めっちゃ付いてるのあると思うから。」

そして、顔の前で両手のひらをくつつけて、「お願い」と付け足した。

嫌です、なんて言えないから、しょうがなく

「分かりました。持ってきます。」

と笑顔で答えた。

…分かるわけないだろ！そんなの自分でやれし。それがマネージャーに頼めばいいじゃん！！

マジ意味わかんない。あーム力つく。だから先生つて嫌い。

ウザい生徒のことこき使うし、偉そうなフリするし。マジありえない！！！！

そんなことを心の中で、あくまでも心の中でつぶやきながら体育館へ向かった。

体育館に入ると人は一人もいなかった。

そつえば今日は体育館使う部は、全部休みだったな。なんでだったかな？

まあそんなことどうでもいいや。早く帰りたいし。

帰ったら何しようかな。パソコンでもやるうかな？それとも録画しておいたテレビでも見ようかな？

…ってそんなのは後で考えればいいか。

まずはサッカーボールだよ。倉庫かな？…

コロコロコロ、トン

…足に何かがぶつかって、それを確認すると…うわ。バスケットボールじゃん。懐かしー。

なんで懐かしかった？それはね、うちは昔バスケットをやっていたからさー！

…いきなりこの口調は変だった？んー分かった。やめるよ。しょう

がないなあ。

まあそれは置いて。さっき言った通り、うちは小学生から中学生までバスケットをやっていた。それも今は、勉強に集中したいからやっていない。

でも一番の要因は……才能がないから。元々運動神経悪かったし、全然上手くなかったから、小・中学校とは違って高校はもっとキツイから、うちには無理だと思った。
てかそれ以上に、猫かぶった時の性格と全然違うから出来ないっしょ（笑）

…でも、ちょっと気になる。中3の春から全然ボール触ってないし。それに、足元に転がってきたヤツ拾わないで無視するなんて、ねえ。と、最もらしい言い訳をつけてボールに少し触れた。

うわー。ちょー懐かしー。このザラザラした感触。独特の匂い。

なんかドリブルしたくなってきた。…誰もいないよね。

えーい、ドリブルしちゃえー！

そして立ち止まったまま、ドリブルをし始めた。

ハハハ、楽しくなってきた。ヤバイ！めっちゃ楽しー。走っちゃえー！
ワー！！ヤバーイ！

ホント楽しー。シュートもしちゃえ！

えい、と投げるとポンツと気持ちいい音が聞こえた。

おお。入ったあ〜。もう一回シュートしちゃえ〜。うわー、また入った！ハハハハ…

ガラガラッ

「!?!」

音がした方を勢い良く見ると、バスケット部の部室から扉を開けてうちを見ている人がいた。

理解するには少し時間が掛かった。

…ん?人?人!?ヤバイ!!見られた!!どうしよ…

「どうしたの?何してんの?」

「え?」

どうしたのって…え?ちょっと、意味わかんないんですけど。

あ!ポーツとしてる場合じゃなかった!!

どうすつぺ。…そうだ!ここは、「逃げるが勝ち」だ!これしかない!一応なんか言つとこう。

「すみません!」

咄嗟に頭に浮かんだ言葉を口に出し、急いで倉庫へと向かった。

ボールボールボール…あつた!うわ汚つ。でもしょうがない。逃げる!

そしてうちは全力疾走した。

途中でさっきの人が「あ、あの!」と呼んだ。

…気がしたただけだね。そうそう。うち、決して無視なんかしてないよ?ほんとにしてないよ?

ただ、呼ばれたかどうか不確かだったからね、もし呼んでなかったらうち恥ずかしい人でしょ？

だから、振り向かなかったんだよ。そう。そうだよ？

…ハア、ハア、ハア…

息切れヤバー。やつぱ運動不足かな？

あ、そうだ。ボール先生に渡さないよ。

そして手の中にあるボールを見て、やつぱり汚いなー、なんて思いながら先生に渡して帰路についた。

まず、頭を整理しよう。

さっきうちのことを見ていたのはあの人だけだったよね。

あの人、何て名前だったかな？

「そういえばあゝ、あのバスケ部の一ノ瀬良先輩いちのせりょうってえゝ、ちよーカツコイイよねえゝ。」

…一ノ瀬良？一ノ瀬、バスケ部…！！

一ノ瀬良先輩だ！そうだ、一ノ瀬先輩！

顔は申し分ないくらい…いや、申し分なんて一切ない良い顔してた。ムカつくな。

…で、明日言いふらされてたらどうしよう？そんなことされたら、今までのうちの努力が無駄に…！

それだけはヤダ！！ムリ！！

どうしよう。なんか良い策ないかな？

…ああ、もう！なんでこんなことになるの！？…元はといえば自分

先輩との出会い（後書き）

こんな感じですよ（笑）

いやー、亜緒は口が悪いですねー（、）、＊（ケラケラ

二度目の出会い（前書き）

第4話です！

楽しんでいただけたら幸いです）・（

二度目の出会い

先輩と出会った次の日。

うちはいつものように朝シャンをした。浴び終わって、朝ごはんを食べながら悩んでいた。

学校に行くか行かないか。

行きたくないといえは行きたくない。でも休むと授業に追いつけなくなる。

自分の名誉を優先させるか、授業を優先させるか。

…うーん。どうしよう。悩む……

やっぱり、学校に行くしかないか。いくらバラされてて周りと気まぐずくても、授業が受けられないわけじゃないし。それに将来、職に就くためには学歴あるのみ。

よし、学校行こう！

家を出る前に、自分の両手でほつたをパンツと叩き、気合を入れて出発した。

学校に着き、教室に入る。そして、バラされていないかとドキドキしながら中にいる人に

「おはよう。」

と声を声をかけると

「あ、おはよー」

「おはよー」

と普段と変わらない陽気な挨拶が返ってきた。

…あれ？も、もしかして、バラされてない？……だよな？

普通バレてたら、詰め寄って来たり、もしくは無視されるとか、コソコソされるとか。

あるよね？それが無いってことは、大丈夫なの？

などと考えていると、突然後頭部を誰かにベシツとはたかれた。

「いたっ」

「突っ立てんのが悪い。何してんの？邪魔だよ」

犯人は、真だった。それでもまだ動かないうちの背中を、強引に押し進み出した。

「わ、わわっ」

「まったく。邪魔だと言ってんのに」

そして真はくすくすと笑い出した。

うちは真に押されたまま、自分の席まで来てしまった。

それが何だか恥ずかしくて、俯いたまま自分の席に座った。

「何かあったのか？」

「え？」

真は唐突にそう聞いてきた。

コイツは何でもおみとおしなのかつ。
でも昨日のことは言っていないのか…。わかんないや。
まあ、言わないことにしよう。

「別に何にもないよ。」

「ホントか？」

真はしかめっ面をして聞いてきたから、うちは笑顔で答えた。

「本当だよ。」

すると、納得がいかないような顔をしながらも

「ふーん。」

と言った。

別にそんな顔しなくても。

てか、何でうちのことなんか気にすんのかな。わけわからん。
どうでもいいか。とにかく、バレないようにしよう。

次の授業は移動教室だった。うちはそのことを忘れていて、のんびりとトイレに行っていた。それから教室に戻ると、誰もいなかった。ものすごく焦った。そして急いで準備をし、廊下を走っていると、

ドンッ

と誰かにぶつかってしまった。

「すみません！」

うちはぶつかった拍子に落ちてしまった教科書などを拾いながら言う、

「いや、こっちこそごめん！ポーツとして……」

とその人が言い、一緒に拾ってくれた。

「はい、どうぞ。………！！！」

「あ、ありがとうございます、………！！！」

拾ってもらったノートを受け取るうとして、顔を上げて見たものは………一ノ瀬先輩だった。

や、ヤバイ！これはヤバイ！！…これは、あれだ。逃げるしかない。うん。そうだ。

「あ、あの、急いでるので……！」

「えっ？ちよつと！！」

「すみません！！」

そしてうちは走り去った。走りながらうちはこつ思った。

あゝマジで今のはヤバイ。ヤバイ。でもしょうがないな。うん。し
ょうがない。

そつそつ。知らない。知らないことにしてよ。そつしてよ。！

これがうちと先輩の二度目の出会い。

二度目の出会い（後書き）

どうでしたでしょうか。

これからもがんばりたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0709z/>

私と先輩と、バスケットと恋。

2011年12月11日14時58分発行